

文章トレーニング

白井健策



ちくま文庫

ない、ということと同時に、ことばを使ってイメージをつくり出すことの面白さも理解でき
るでしょう。

前に、ことばがびったりと所期のねらい通りに受けとられるかどうかはむずかしい問題だ、
と書きましたが、書き手と読み手の間の理解のずれをなくす、あるいは極力小さくするため
には、ことばの定義をはっきりさせる必要が起ります。

一万円札を示して、これは九千五百円でもない、一万五百円でもない、きっかり一万円で
すよ、と確認するようなものです。

ところが、実は、日常生活においては、われわれのことばの使い方はかなりいいかげんに
なっています。

定義、ということばで思い出すのは、たとえばフランスの高等学校の教科書にあらわれる、
実に厳密なことばの定義の仕方です。

文科系の最上學級の哲学科クラス用教科書は『哲学講義』（筑摩書房）として日本語にも
翻訳されています。哲学や論理学では、ことばの定義を厳密にするのは当たり前だ、という言
い方もできますが、実地に使われているこういう教科書をじっくり読むと、作文というものは
「正確に定義された用語を用い、厳格に文法、修辭の訓練を経た文章を用いて、自己の思
考を組織することなのであり、それ以外に思想というものはありえない」（森有正氏の序文）

うそだと思う方、新聞記者だから新聞の宣伝をしているのだらうと疑う方は、ご自身でや
つてごらんになるとよろしい。

女性の地位の問題でも、教育の問題でも、何でもいいのです。ある問題を追いながら、情
報をさがし求めるつもりで通読するのです。

あなたのアンテナが、とぎすまされ、錆びついていない時には、平生見すごしていた情報
がひっかかってくる、微妙な点にもアンテナが感応する、ということが身をもつて体験でき
るでしょう。

そのつもりになって、一度、十日間くらいの新聞を、時間をかけてまとめて読んで、自分
のきめた問題ごとに切り抜きをつくってごらん下さい。毎日新聞を讀んでいたはずなのに、
何と、見ているものが実は見えていなかった、ということに気づくでしょう。人間の、情報
の摂取の仕方にはそういうところがあるのです。

少くとも、そういう漫然とした気分を転換して、アンテナを光らせておく、意識化の小道
具としても、メモは役に立つはずです。

俳句や短歌をやる人が、電車に乗っていても手帳をひろげているのを見ることがあります。
あ、アンテナ全開だな、と思わされます。

取材メモは、新聞記者だけのものではありません。